

THE USE OF AMPHOTERICIN B IN THE TREATMENT OF OTITIS MEDIA

Kazuo Kawarada M.D.

Nagano Red Cross Hospital

点耳療法での真菌対策

河原田 和夫

長野赤十字病院耳鼻科

はじめに

慢性中耳炎における保存的治療の目標は、鼓室内の清掃、炎症性病変からの離脱助長などにあるが、外来での処置として、鼓室内の洗浄、肉芽病変の除去が主となる。鼓室内の細菌の動態は、宿主の防御機能、点耳抗生剤の使用により左右される。

著者らの外来においては、診療形態の限界により、慢性中耳炎例では、月1~2回鼓室内洗浄などの処置を行い、点耳抗生剤投与（在宅点耳）という方法をとっている。保険診療上、点耳剤2個以内投与であること、点耳抗生剤使用により真菌増殖を来す例のみられることなど考慮しておかなければならない。

前者については、ルール上のことなので、別の面で検討されることを期待するが、後者の対策として抗真菌剤の局所使用が望ましいと考えられたので、外来での処置時に、抗真菌剤の局所投与（点耳）を試みた。

症 例

この1年間に外来で加療した穿孔性中耳炎のうち、経過観察しえた13例（12~73歳、男8例、女5例）を対象とした。

3~4週間に1回、外来において、鼓室内

洗浄などの処置と抗真菌剤（アンホテリシンB・ファンギゾン20mg水溶液）の点耳をした。この間、点耳抗生剤ベストロンによる在宅点耳を併用した。

更に、カンジダが検出された3例と検出しなかった4例に、それぞれカンジダ皮内反応（遅延型）を施行した。前者は、3例とも陰性、後者は、3例陽性、1例陰性であった。

成 績

治療成績は、表1に示した通りであるが、ベストロン使用前に、カンジダないしアスペルギルスが検出された例は、13例中5例であ

表 1

点耳薬使用前後の真菌の動態(ベストロン)

	前	後	効果
1 K. J. 13F	+ (カンジダ)	-	±
2 T. M. 18F	-	-	±
3 T. T. 30F	+ (カンジダ)	-	+
4 M. S. 69M	-	-	±
5 K. I. 60M	+ (アスペルギルス)	+ (アスペルギルス)	±
6 H. M. 52M	-	-	+
7 W. F. 67M	-	-	+
8 Y. M. 60F	+ (カンジダ)	-	+
9 T. N. 15M	-	-	±
10 N. S. 62F	-	-	±
11 N. K. 73M	-	-	-
12 S. S. 63F	+* (アスペルギルス)	-	±
13 O. Y. 43M	-	-	-

* 細菌(+)

たが、抗真菌剤点耳療法により、1例に減少した。また新たな真菌検出例はみられなかった。

耳漏の消失ないし減少は、13例中11例にみられ、抗真菌剤外来点耳およびベストロン在宅点耳の使用に、一定の効果がみられた。

総 括

慢性中耳炎例での点耳抗生剤の使用にあたっては、内耳への直接的影響もさることながら、耐性菌の出現、真菌増殖などを考慮しなければならぬ。特に、後者の真菌増殖あるいは真菌の感染がみられる場合には、適切な対応が求められている。

真菌感染を防ぐには、局所清掃を行うことで達するが、診療形態上、頻回の処置が不可

能であるような著者の外来では、別の方途を考えなければならない。そのため、抗真菌剤の局所使用ということになるのであるが、月1回程度の点耳療法で、はたして効果があるかが問題となろう。

今回の対象例についてみれば、在宅点耳療法を主として、月1～2回の抗真菌剤局所使用で、一定の効果がみられたことから、ひきつづき試みている治療法であると考えた。

真菌感染の際、考慮しておくことは、宿主の防御機構、特に細胞性免疫がどうなっているかであろう。全例に行っているわけではないが、カンジダに感作されている例では、局所でのカンジダ検出がみられないと考えられた。

質 疑 応 答

質問 木村 栄成（東海大）

抗真菌剤は何を使用したかお教えいただきたい。

応答 河原田和夫（長野赤十字病院）

ファンギゾン20mgを使用した。